

問題解決学習の成立というようなテーマで文章を書きました。

あるところから依頼のあった文書ですが、書いていく途中で全体のテーマと不整合が起きたのでボツにしました。でも、もったいないので転載をします。(笑)

まず第一に「目的の納得」である。

子ども自身が、なぜそれを学習する必要があるのかを納得しているということである。新学力観以降、子どもの「興味・関心」の喚起にウエイトが置かれすぎた。教師は子どもの「興味・関心」に沿うことに躍りになってきた。子どもの「興味・関心」に沿ってさえいれば、学習は有意義なものになるという「興味・関心」信仰が野火のように広がっている。この信仰によって現場の授業は墮落した。私は、ある公開授業で、教師が開口一番「何か調べたいことはないか？」とあからさまに子どもたちに尋ねる場面に出くわしたことがある。そんな無軌道で、無制限な学習があつていいのだろうか。こうした授業は、子どもたちの「興味・関心」に沿って学習させていることになるだろうが、そのことがかえって「これは何のために学習しているか」といった学習の目的を見えづらくしていると思う。

そもそも、子どもの「興味・関心」にそつて有意義な学習が進められるなら、子どもは学校に来なくていいのだ。家に居て、自分で「興味・関心」に沿って課題を立て、解決していけばいいわけである。しかし、そんなことはたいていの場合は無理だ。大方の子どもは自分の「興味・関心」に沿って、適切な課題を立てられない。このことは現場の教師なら相当はつきりと気付いているはずだ。

そこで、必要なのは教師が、学習のねらいに沿った子どもたちの「興味・関心」を引き出し、それを生かしつつ適切な課題が設定できるように援助することである。また、その課題に取り組むことにどのような意義があるのかを価値づけし気付かせてあげることである。

第二に、「方法の提示」である。

こんな経験はないだろうか。総合の時間などに「調べなさい」と言う。すると子どもたちは、意気揚々とコンピュータ室へと向かい、力強く電源を入れる。ここまではいい。しかし、その時間の終わり頃になってどうなっているかという、惨憺たるものだ。子どものノートにはほとんど何も書かれていない。そして、「何をしていたの？」と慥然として尋ねてみると子どもの答えは決まっている。

「だって先生、いいサイトがなかったんだもん」

また、こうした場面を見たことはないだろうか。学習の成果を発表し合う授業で、子どもたちが模造紙に書かれてあることを読み上げている。子どもたちはポスターに書いてある文字をそのまま読み上げる。そのまま読み上げることも問題なのだが、その文章は、どう考えても子どもの考えたものとは思えない。つまり、資料をただ写しているだけなのだ。だから周りの子どもから質問されても、きちんとした答えは返せない。

前者の例では、コンピュータという方法が本当に適切だったのか、また検索の仕方は指導したか、サイトを見てどのようにまとめるかを指導したのかが気になる。後者の例では、発表の仕方、資料の活用の仕方、ポスターの描き方を指導したのかが気になる。これら二つの例に共通しているのは、教師の指導不足である。新学力観以降、その曲解によって教師は指導することに臆病になっている。

もっと学習の方法（学び方）を教師は指導すべきだ。学習者としてまだ未熟な子どもを指導することに何のためらいがあるだろうか。たくさんの方を教え、それを賢く選択できるような子どもを育てるべきである。

第三に、「成長の自覚」である。

子どもの「成長の自覚」は、どのようなときにされるのか。

それは、まずなんと言っても教師に評価されたときである。成果があったことに対して教師が褒めてあげる。そのことによって子ども自身が成長を自覚するということである。この場合、よく言われるのが「とにかく褒めまくれ」とか「たくさん褒めよ」ということだ。しかし、私はこうした考えに反対だ。そうではなく教師は「子どもががんばっている時を見逃さないようにして、褒めてほしいときに褒めてあげる」のが良い。そうすることが結果的に子どもの信頼を得ることになると思うからである。私たちがそうではないだろうか。たいしてがんばってもいないときに、人から褒められてもただいぶかしく思うだけである。褒めてくれた人にたいして、「なにか下心があるのではないかしら」と疑ったりもする。逆に、がんばっているときに褒めてもらえると、「この人は私のことをきちんと見ているなあ」と、その人のことを信頼する。これと同じように、教師が子どもを指導する際にも、しっかりと子どもを見取り、適時に適切に評価し、子どもに「成長の自覚」を持たせることが肝要である。